

# おわりに

---



2010年にカナダ、サスカチュワン州バトーシュ(地図1)で開かれた先住民族メイティーの儀式。この年から125年前の1885年に、メイティーはカナダ軍とここで最後の軍事決戦をし、破れた。写真中央のステージでは、このとき戦ったメイティーの戦士の子孫とカナダ軍兵士の子孫が抱き合い、「和解」の儀式を行った。背後には戦死者の墓がある。2010年著者撮影。

本書では、先住民族の伝統文化と価値観を深く理解するため、いわばその「文化」とも呼べるものについて、いくつかの具体的な事例をみながら考えてきた。はじめに、「文化的主権」という概念を紹介し、そこから先住民族にとって文化と主権が密接な関係を持っていることをみた。これは、第1章で述べた文化的主権の骨子の1番目の項目、「主権は文化と密接に結びついている」にあたる。

この文化と主権の関係は、決して北米の先住民族だけに理解され得るものではなく、地域に根ざした伝統文化をある程度維持してきた日本各地の人々にも共感できるものだろう。北米の先住民族は、物語など文化的な表象を通して精神世界を次世代に伝えてきた。物語による文化や価値観の伝達は、現在の日本においても残っている。例えば、第1章で紹介した『千と千尋の神隠し』という映画は、道徳的な側面を持つ口承の伝統を受け継いでいる。また、日本各地には「昔話」などが今も語り継がれている。

物語は、倫理観や正義観を醸成し、法律の礎となる役割をも果たして来た。第2章でみたように、我々が今日考える正義は、物語形式によって広められた面がある。例えば、アメリカとカナダでは、人種の隔離は差別ではないと考えられた時代があった。現在は、それに反対したキング牧師の伝記や『アンクルトムの小屋』（1852年）などの小説から、人種差別の不正義を学ぶ。あるいは、今日の大学の授業でも、講師がスライドや資料を使いながら、口頭で学生に人種差別の問題点について伝えている。

さらに、我々の歴史も物語形式によって伝えられてきた。教科書から歴史を座学で学ぶ教育は、人類史の中では比較的新しいものである。人類は、何世紀もの間、口承や歌、儀式、記念碑、景観などを通して歴史を学んできた。『日本書紀』は、今日宗教の一部と日本人が考える精神世界や超自然の世界と密接な関係がある歴史書である。そして、現在の日本人の歴史観に大きな影響を与えてもいる。また、親から子へ家族の歴史が語り継がれるとき、我々は口承や物語形式を使っている。

しかし、啓蒙主義や理性の時代、そして植民地時代の到来によって、歴史や正義の表現方法は大きな変化をみせることになった。第3章では、科学の名の下に伝統的な歴史観を再構築し、国の求める歴史認識に国民を同化する論理を「植民主義的な歴史」と呼んだ。この論理には「勝者一敗者」論、宿命論、

社会進化論、偉人論の4種類がある。これらの論理から学ぶ歴史は、多くの国民や先住民自身が直接どのように歴史と関わっているのかを教えてくれない。これらの歴史を学ぶことで、自分自身の存在を歴史的な軸からみつめる機会とはならない場合がほとんどであろう。

さらに、科学の発達は先住民族の社会にもいくつかの副産物を残した。本書では、これを文化専有という概念からアプローチした。ここでは、大きく3種類の問題点に分け、第4章から第6章で詳しくみた。これらの問題点は、文化的主権の骨子の3番目にあたる、「主権者は自らの文化遺産を保有・管理するため、ほかの民族や国家の文化専有から自らを守る権利を持つ」という箇所に関係する。

第4章では、骨相学と頭骨学を含めた人種の科学が、先住民族の遺骨を収集した事例をみた。そして、科学者がなぜ先住民族の骨を必要とし、どのような方法で収集したのか考えた。さらに、科学と人権思想のはざままで揺れ動く北米社会の現状をみた。現在、日本でもアイヌ民族の頭蓋骨の扱いについて問題になっている。日本人にとっても決して他人事ではない。

次に、アメリカ大衆文化に浸透した、商品としての先住民族の文化を第5章でみた。ここでは、アメリカの大学やプロスポーツチームが先住民族を揶揄したスポーツマスコットを使っている事例を紹介した。ほかにも、先住民族の儀式を真似る大学の友愛団体やボーイスカウト運動、ニューエイジのスウェットロジ儀式、ビールの商標になった「クレージー・ホース」という先住民族の英雄についての事例をみながら、伝統の価値と商品の価値の問題点を考えた。

第6章では、文学作品や映画、演劇に代表される近代の「文化産業」に注目し、その中に使われた先住民族のイメージを明らかにした。読者は、この三つのジャンルを一つの章の中でみることで、文学、映画、演劇に共通した先住民族のイメージが北米で形成されてきたことに気づいただろう。そして、文化産業が先住民族の伝統文化を誤解したまま、大衆文化に同化させてきたことをみた。

ダイム・ノベルやカール・マイのヴィネトー・シリーズ、バッファロー・ビルのワイルド・ウエスト劇、ハリウッド映画にみる「インディアン」のイメージは、19世紀の後半から20世紀の初めに確立されたものである。そして、今

日も北米だけでなく、日本を含めた国際社会に大きな影響力を持っている。

これら3種類の文化専有の事例から、我々が学ぶことができることは何だろうか。一つは、誤解が蔓延している現状では、異文化理解は進まないということだろう。そこで、第7章で先住民族の自治と異文化間の和解について詳しく検討した。

行政レベルで行われてきた先住民族の自治への取り組みは、ある一定の評価はできるが、先住民族が求める自治と同じではない。しかし、今日先住民族が北米で独立した国を形成するには、環境汚染処理や経済開発問題など、あまりにも多くの障害がある。むしろ、アメリカやカナダの行政と経済界が、先住民族の伝統文化を深く理解し、和解をした上で、より良い協働関係を築いていくことのほうが現実的な将来展望であろう。

そこで、第7章では、カナダ先住民族のチーフ、デルガムークウの証言などを例にあげ、先住民族の考える主権の「原泉」について考えた。また、先住民族がトライバル法廷などの制度に伝統的な要素を取り入れる例を紹介した。こうした例から、異文化理解、そして和解へと至るための方向性を探ってみた。これらさまざまな事例から、読者が異文化間の誤解を解くことが今も必要であることを認識し、そして今後さらに和解の努力をしていくべきであることを理解されたならば、著者にとって幸いである。

しかし、もう一つ不明な点が残る。1990年代以降、先住民族の権利に関してさまざまな角度から努力がなされ、ある程度の成果をあげてきたにもかかわらず、なぜいまだに文化専有の事例はなくなるのだろうか。第7章でみたように、和解へのプロセスもさまざまな形で行われてきているのにも関わらず、なぜいまだに問題が生じるのであろうか。文化専有の事例は広く異文化間の誤解を生むだけでなく、和解へのプロセスを阻害する。問題は我々自身の認識や理解にあるのだろうか、その誤解を軽減するための対策はあるのだろうか。そして、この本を読む日本の読者が、この疑問にどう答えることができるのだろうか。

対策として一般的に考えられるのは、本書で紹介した点も含めると、法律の整備をはじめ教育を通じた倫理観の涵養などがあげられる。ほかに、メディアを通じたドキュメンタリーや討論会、ワークショップ、公開講座などもある

だろう。しかし、これらは根本的な解決をもたらすとは限らない。なぜならば、法律整備やメディアの利用、教育改革などは対策のための「場」であり、どう解決するかという中身を明確にしていないからである。いってみれば、家の改築や模様替えをただけでは、そこに住む家族の幸福は得られない、という状況に近い。あるいは教育改革における組織体制が整備されても、その中での教育の質、あるいは教員の教育者としての質が担保されなければ改革の効果がみられない、という状況に近いといえるだろう。

伝統文化が誤解され他文化に専有されることから生じる問題を回避するには、場の整備以上に、現世代である我々が後世にいったい何を残していきたいのか、という中身を明確にすることから始めなければならない。この点は、日本人にも大いにあてはまるだろう。

人はさまざまな社会的立場にあっても、だれもが後世に「善いもの」を残していきたいと望んでいるだろう。ただ、その善いものとは何かと聞かれれば人によって答えはまちまちである。第7章でみた、ナヴァホ民族のピーター・マクドナルドのように、先住民族が鉱物資源の開発に積極的に関わることで後世に金銭的豊かさや経済的自立、インフラ整備や経営のノウハウなどの知識を後世に残そうとしたことも一つの「善いもの」に関するアイデアであろう。

一方、ウランや石炭による環境破壊を懸念し鉱山開発に反対したナヴァホの人たちは、後世に伝統的な経済や環境・景観、価値観を残したいと訴えてきた。これもまた「善いもの」といえる。このような一見相反する価値観を第7章では「持続可能な開発・発展」という国際的な標語からアプローチし、先住民族が「天然資源の呪い」から自らを解き放つ方向性を展望した。また、利権が衝突した際の和解へのシナリオも紹介した。

このように一見相反する価値観を一つの共通した方向へ導くことのできる力は、文化から生まれると著者は考える。今日文化専有がなくなる原因は、「善いもの」あるいは民族や人類の遺産を未来志向で考える機会が、教育カリキュラムや企業研修、各種職業訓練、親の教育などに少ないからではないだろうか。

親は我が子を見つめ、いったい自分がこの子に遺すことのできる最善のものは何なのか、人生を通して学びながら追求していくべきであろう。この疑問は、さまざまな社会的立場からも考えることが可能である。例えば、著者も含めた

教育者は学生をみつめ、我々が教育の場を通して学生に遺すべき最善のものを追求していく必要がある。それは時代とともに変化するものであろうが、時代とともに開発・発展可能なものでもあるべきだろう。

こうした視点に立ったとき、自らの伝統文化の遺産や価値を守ろうとする先住民族の意図がさらなる共感を持って理解できるであろう。そして、日本人が、今後目指していかなくてはならないアイヌ民族や琉球民族との関係改善と和解へも、新たな視点を投じることになるだろう。

北米だけでなく日本でも、多様な文化が共存できる社会や環境こそが、豊かな文化を伝統として次世代へ引き継いでいくための場となるのではないだろうか。実生活のなかで、主権という概念を文化や遺産、伝統と結びつけて考えることは決して不可能なことではない。むしろ、この理解を深めることこそが持続可能な発展への要素となるであろうし、より深い先住民族理解へと日本人を導いてくれるだろう。

## 謝 辞

本書は、もともと『先住民族の10年 News』という月刊誌に18回連載（2006年129号～2008年150号）された記事に基づいている。その後、2年ほど費やし、大幅な修正と加筆を加え、元の原稿の2倍ほどの量になった。このプロセスは、科学研究費補助金「基盤研究B」と「挑戦的萌芽研究」の助成によるところが大きい。また、筑波大学出版会の査読者3名と編集の安田百合さんには貴重なご意見をいただいた。本書は多くの先住民から学んだことも多い。ここで心から感謝の意を表したい。